

蕪村句集

上

洛、夜半亭
 燕村老人、
 とし頃海
 に對し、山
 に嘯き、花
 に眠、鳥に
 寐覺て、句
 を吐事十
 万八千、そ
 の秀たる
 ものは、ひ
 との耳底
 にとゞま

洛夜半亭
 燕村老人
 とし頃海
 に對し山
 に嘯き花
 に眠鳥に
 寐覺て句
 を吐事十
 万八千そ
 の秀たる
 ものはひ
 との耳底
 にとゞま

り、諸集に
あらはる。
惜むべし
去年の冬
衰病終に
夜臺に枕
して一字
不説。高弟
几童頓て
金婆羅華
をつたへ
て、門人の
ため一集

とちやめ諸集を阿はる
惜むべし去年の冬
衰病終に夜臺に枕
して一字不説高弟
几童頓て金婆羅華
をつたへて門人の
ため一集

を撰、書肆
 佳業にち
 からをあ
 はせて、こ
 とし小祥
 忌辰の永
 慕とす。は
 た予と亡
 叟とまじ
 はりひさ
 しきまゝ
 に、遙に武
 江に告て

一集就撰書肆佳業あり
 ちを所を望むは
 小祥忌辰の永慕とす
 は予と亡叟とまじ
 はりひさしきまゝ
 に、遙に武江に告て

それが序
を需む。予

又わすれ

めや舊識

五十余年。

雪中庵

夢太

予の序を需むる
わすれぬや旧識五十余年

雪中庵

夢太

蘇公羽向集卷之上

几重著

春之部

ほうらいの山まつりせむ老の春
日の光今朝や鰯のかしらより
三椀の雑煮かゆるや長者ぶり

離落

うぐひすのあちこちとするや小家がち
鶯の聲遠き日も暮にけり
うぐひすの鹿相がましき初音哉
鶯を雀歌と見しそれも春

鶯賛

うぐひすや賢過たる軒の梅
鶯の日枝をうしろに高音哉
うぐひすや家内揃ふて飯時分
鶯や茨べりて高う飛ぶ
うぐひすの啼やちいさき口明て

禁城春色曉蒼々

青柳や我大君の草か木か
若草に根をわすれたる柳かな
梅ちりてさびしく成しやなぎ哉
捨やらで柳さしけり雨のひま
青柳や芹生の里のせりの中
出る杭をうたうとしたりや柳かな

草菴

二もとの梅に遅速を愛す哉
うめ折て鋏手にかこつ薫かな
白梅や墨芳しき鴻鵠館
しら梅や誰むかしより垣の外
舞の場もふけたり梅がもと
出べくとして出すなりぬうめの宿
宿の梅折取ほどになりけり

摺子木で重箱を洗ふがどくせよ

とは、政の嚴刻なるをいましめ
給ふ。賢き御代の春にあふて

隈くに残る寒さやうめの花
しら梅や北野の茶店にすまひ取
うめ散や螺鈿こぼるの卓の上
梅咲て帯買ふ室の遊女かな
源八をわたりて梅のあるじ哉
燈を置で人あるさまや梅が宿

あらむつかしの假名遣ひやな。

字儀(義)に害あらずんばア、ま
ゝよ

梅咲ぬどれがむめやらうめじややら
しら梅の枯木にもどる月夜哉
小豆賣小家の梅のつぼみがち
梅遠近南すべく北すべく

早春

なには女や京を寒がる御忌詣
御忌の鐘ひびくや谷の氷まで
やぶ入の夢や小豆の煮るうち
藪いりやよそ目ながらの愛宕山

やぶいりや守袋をわすれ草
養父入や鉄漿もらひ来る傘の下
やぶ入は中山寺の男かな

人 口

七くさや袴の紐の片むすび
これきりに徑盡たり芹の中
古寺やほうろく捨るせりの中
几董とわきのはまにあそびし時

筋違にふとん敷たり宵の春
肘白き僧のかり腰や宵の春
春の夜に尊き御所を身かな
春月や印金堂の木間より

春夜聞レ琴

瀟湘の鴈のなみだやおぼろ月
折釘に烏帽子かけたり春の宿
公達に狐化たり宵の春

もろこしの詩客は千金の宵を
しみ、我朝の歌人はむらさきの

暗を貫す

春の夜や宵あけぼのゝ其中に

女俱して内裏拜まんおぼろ月
藥盗む女やは有おぼろ月
よき人を宿す小家や臘月
さしぬきを足でぬぐ夜や臘月

野 望

草霞み水に聲なき日ぐれ哉
指南車を胡地に引去る霞哉
高麗舟のよらで過ゆく霞かな
橋なくて日暮んとする春の水
春水や四條五條の橋の下
足よはのわたりて濁るはるの水
春の水背戸に田作らんとぞ思ふ
春の水にうたゝ鶴繩の稽古哉
地を追ふ鱗のおもひや春の水

西の京にほけもの栖て、久しく
あれ果たる家有けり。今は其さ

たなくて

春雨や人住みて煙壁を洩る
物種の袋ぬらしつ春のあめ
春雨や身にふる頭巾着たりけり

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど
瀧口に燈を呼聲や春の雨
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書ぬ身のあはれなる
はるさめや暮なんとしてけふも有
春雨やものがたりゆく簑と傘
柴漬の沈みもやらで春の雨
春雨やいざよふ月の海半
はるさめや綱が袂に小でうちん

ある隠士のもとにて

古庭に茶筌花さく椿かな
あぢきなや椿落うづむにはたずみ
玉人の座右にひらくつばき哉
初午やその家／＼の袖だゝみ
はつむまや鳥羽四塚の鶏の聲
初午や物種うりに日のあたる
苔とはなれもしらずよ露のとう

ある人のもとにて

命婦よりばた餅たばす彼岸哉
そこ／＼に京見過しぬ田にし賣
なつかしき津守の里や田螺あへ
靜さに堪えて水澄たにしかな
鴈立て鷺破田にし戸を閉る
雁行て門田も遠くおもはるゝ
歸る鴈田ごとの月の曇る夜に
きのふ去けふいに鴈のなき夜哉

郊外

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛
かげろふや蜚に土をめづる人

芭蕉庵會

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ
はた打よこちの在所の鐘が鳴
畑打や木間の寺の鐘供養

小原にて

春雨の中におぼろの清水哉
日くるゝに雉子うつ春の山邊かな
柴刈に碧を出るや雉の聲

龜山へ通ふ大工やきじの聲
元山や何にかくれてきじのこゑ
むくと起て雉追ふ犬や寶でら
木瓜の陰に貌類ひ住まじす哉

琴心挑美人一

妹が垣根さみせん草の花咲ぬ
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺
紅梅の落花燃らむ馬の糞
垣越にものうちかたる接木哉
裏門の寺に逢着す蓬かな
畑うちや法三章の札のもと
きじ啼や草の武藏の八平氏
きじ鳴や坂を下りての驛舎

西山遅日

山鳥の尾をふむ春の入日哉
遅き日や雉子の下りゐる橋の上

懷舊

遅き日のつもりて遠きむかしかな
春の海終日のたり／＼哉

鳥うつや鳥さへ啼ぬ山かけに
耕や五石の粟のあるじ貌
飛かはすやたけごゝろや親雀
大津繪に糞落しゆく燕かな
大和路の宮もわら屋もつばめ哉
つばくらや水田の風に吹れ貌
燕啼て夜蛇をうつ小家哉

無爲庵會

曙のむらさきの暮や春の風
野ばかまの法師が旅や春のかぜ
片町にさらさ染るや春の風
のうれんに東風吹いせの出店哉
河内路や東風吹送る巫女が袖

几童が蛙合催しけるに

月に聞て蛙ながむる田面かな
闇に座して遠き蛙をきく夜哉
苗代の色紙に遊ぶかはづかな
日は日くれよ夜は夜明々よと啼蛙
連歌してもどる夜鳥羽の蛙哉

獨鉗錄首水かけ論のかはづかな
うつなきつまみごゝろの胡蝶哉
曉の雨やすぐろの薄はら
よもすがら音なき雨や種俵
古河の流を引つ種おろし
しのゝめに小雨降出す焼野哉

加久夜長帯刀はさうなき數寄も
の也けり。古曾部の入道はじめ
てのげざんに、引出物見すべき
とて、錦の小袋をさがしもとめ
ける風流などおもひ出つゝ、す
ずる春色にたえず侍れば

山吹や井手を流るゝ飽屑
居りたる舟を上ればすみれ哉
骨拾ふ人にしたしき菫かな
わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ
野とゝもに焼る地藏のしきみ哉
つゝじ野やあらぬ所に麥島
つゝじ咲て石移したる嬉しさよ
近道へ出てうれし野ゝ躑躅哉

つゝじ咲て片山里の飯白し
岩に腰我頼光のつゝじ哉

上巳

古雛やむかしの人の袖几帳
箱を出る貌わすれめや雛二對
たらちねのつまゝすありや雛の鼻
出代や春さめゝと古葛籠
雛見世の灯を引ころや春の雨
雛祭る都はづれや桃の月
喰ふて寝て牛にならばや桃花
商人を吼る犬ありもゝの花
さくらより桃にしたしき小家哉
家中衆にさむしろ振ふもゝの宿
八巾きのふの空のありどころ
やぶいりのまたいで過ぬ八巾の糸

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかげや散さくら
手まぐらの夢はかさしの櫻哉
剛力は徒に見過ぬ山ざくら

曉臺が伏水嵯峨に遊べるに伴ひ
て

夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人
暮んとす春をゝしほの山ざくら
錢買て入るやよしのゝ山ざくら

糸櫻賛

ゆき暮て雨もる宿やいとざくら
歌屑の松に吹れて山ざくら
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻
嵯峨ひと日閑院様のさくら哉
みよし野ゝちか道寒し山櫻
旅人の鼻まだ寒し初ざくら
海手より日は照つけて山ざくら

吉野

花に遠く櫻に近しよしの川
花に暮て我家遠き野道かな
花ちるやおもたき笈のうしろより
花の御能過て夜を泣浪花人
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉

高野を下る日

かくれ住て花に眞田が諺かな
玉川に高野ゝ花や流れ去
なら道や當飯ばたけの花一本

日暮るゝほど嵐山を出る

嵯峨へ歸る人はいつこの花に暮し
花の香や嵯峨のともし火消る時

雨日嵐山にあそぶ

笈士の簑やあらしの花衣
傾城は後の世かけて花見かな
花に舞へで歸るさにくし白拍子
花に來て花にいねぶるいとま哉

なには人の木や町にやどりゐし

を訪ひて

花を踏し草履も見えて朝寢哉
居風呂に後夜きく花のもどりかな
鶯のたまゝ啼や花の山
ねぶたさの春は御室の花よりぞ

一片花飛滅却春

さくら狩美人の腹や滅却す
花の暮兼好を覗く女あり

やごとなき御かたのかざりおろ
させ給ひて、かゝるさびしき地
にすみ給ひけるにや

小冠者出て花見る人を咎けり
にほひある衣も疊ます春の暮
誰ためのひくき枕ぞはるのくれ
閉帳の錦たれたり春の夕
うたゝ寝のさむれば春の日くれたり
春の夕たえなむとする香をつぐ
花ちりて木間の寺と成にけり
苗代や鞍馬の櫻ちりにけり
甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花
梨の花月に書よむ女あり
人なき日藤に培ふ法師かな
山もとに米踏音や藤のはな
うつむけに春うちあけて藤の花

春景

菜の花や月は東に日は西に
なのはなや笋見ゆる小風呂敷
菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

春夜盛會

爐塞て元風の風呂に入身哉
爐ふさぎや床は維摩に掛替る

暮春

ゆく春や遠巡として遅さくら
行春や撰者をうらむ歌の主
洗足の盥も漏りてゆく春や
けふのみの春をあるひて仕舞けり

召波の別業に遊びて

行春や白き花見ゆ垣のひま
春をしむ座主の聯句に召れけり
行春やむらさきさむる筑波山
まだ長ふなる日に春の限りかな
ゆく春や横河へのぼるいもの神
ある人に句を乞はれて

返歌なき青女房よくれの春
春惜しむ宿やあふみの置火燧

夏之部

絹着せぬ家中ゆゝしき更衣
辻駕によき人のせつころもがへ
大兵の廿あまりや更衣
ころもがへ印籠買に所化二人

眺望

更衣野路の人はつかに白し
たのもしき矢數のぬしの拾哉
瘦肺の毛に微風あり更衣
御手討の夫婦なりしを更衣

しれるおうなのもとより、ふる
きゝぬのわたぬきたるに、ふみ
添てをくりければ

橋のかことがましきあはせかな
更衣いやしからざるはした錢
鞘走る友切丸やほとゝぎす
ほとゝぎす平安城を筋違に
子規柩をつかむ雲間より
春過てなつかぬ鳥や杜鵑

ほとゝぎす待や都のそらだのめ

大徳寺にて

時鳥繪になけ東四郎次郎
岩倉の狂女戀せよ子規
稻葉殿の御茶たふ夜や時鳥

箱根山を越る日、みやこの友に
申遣す

わするなよほどは雲助ほとゝぎす
歌なくてきぬぐつらし時鳥
草の雨祭の車過てのち
牡丹散て打かさなりぬ二三片

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐んとす
寂として客の絶間のぼたん哉
地車のとどろとひゞく牡丹かな
ちりて後おもかげにたつぼたん哉
牡丹切て氣のおとろひし夕かな
山蟻のあからさま也白牡丹
廣庭のぼたんや天の一方に

柴庵の主人、杜鵑布殿の二題を
出していづれ一題に發句せよと
有。されば雲井に走て王侯に交
らむよりは、鶴衣披髮にして山
中に名利をいとわんには。

狂居士の首にかけた敷輻鼓鳥
閑居鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
山人は人也かんこどりは鳥なりけり
食次の底たゞく晋やかんこ鳥
足跡を字にもよまれず閑居鳥
うへ見えぬ笠置の森やかんこどり
むづかしき鳩の禮義やかんこどり
閑居鳥さくらの枝も踏で居る
かんこどり可もなく不可もなくね哉

探題 實盛

名のれゝ雨しのはらのほとゝぎす
かきつばたべたりと鶉のたれてける
宵くゝの雨に晋なし杜若

雲裡房に橋立に別る

みじか夜や六里の松に更たらす

鮎くれてよらで過行夜半の門
みじか夜や毛むしの上に露の玉
短夜や同心衆の川手水
みじか夜や枕にちかき銀屏風
短夜や芦間流るゝ蟹の泡
みじか夜や二尺落ゆく大井川

探題老犬

みじか夜を眠らでもるや翁丸
短夜や浪うち際の捨篋
みじか夜やいとま給る白拍子
みじか夜や小見世明たる町はづれ

東都の人を大津の驛に送る

短夜や一ツあまりて志賀の松
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
卯の花のこぼるゝ蔦の廣葉哉
来て見れば夕の櫻實となりぬ

圓位上人の所願にもそむきたる

身のいとかなしきさま也

實さくらや死のこりたる菫の主
しのゝめや雲見えなくに夢の雨

砂川や或は夢を流れ越す
夢の葉を此君と申せ雀鮮
三井寺や日は午にせまる若楓

あらに居をトしたるに

釣しのぶ軒にさはらぬ住居かな
蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉
窓の燈の梢にのぼる若葉哉
不二ひとつづみ残してわかばかな
絶頂の城たのもしき若葉かな
若葉して水白く麥黄たり
山に添ふて小舟漕ゆく若ば哉
她を截てわたる谷路の若葉哉
蚊屋の内にぼたる放してア、樂や
尼寺や能々虧たるゝ宵月夜
あら涼し裾吹蚊屋も根なし草
蚊屋を出て内に居ぬ身の夜は明ぬ

よすがら三本樹の水樓に宴して

明やすき夜をかくしてや東山
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし

うは風に蚊の流れゆく野河哉
蚊やりしてまいらす僧の坐右かな

嵯峨にて

三軒家大坂人のかやり哉
蚊の聲す忍冬の花の散たびに

諸子比枝の僧房に會す。余はい
たつきのために此行にもれぬ

蚊屋つりて翠微つくらむ家の内
若竹や橋本の遊女ありやなし
笋の藪の案内やをとしざし
若竹や夕日の嵯峨と成にけり
筍や甥の法師が寺とはん
けしの花籬すべくもあらぬ哉
垣越て墓の避行かやりかな

嵯峨の雅因が閑を訪て

うは風に音なき麥を枕もと
長旅や駕なき村の麥ぼこり
病人の駕も過けり麥の秋
旅芝居穗麥がもとの鏡たて

洛東のはせを薙にて、目前のけしきを申出侍る

蕎麥あしき京をかくして穂麥哉

狐火やいづこ河内の麥昌

大魯几董などゝ布引瀧見にまかりてかへさ途中吟

春や穂麥が中の水車

丹波の加悦といふ所に

夏河を越すうれしさよ手に草履

なれ過た鮒をあそじの遺恨哉

鮒桶をこれへと樹下に床几哉

鮒つけて誰待としもなき身哉

鮒すしや彦根が城に雲かゝる

兎足三周の正當は文月中の四日

なるを、卯月のけふにしめて、

追善いとなみけるに申遣す。

麥刈ぬ近道來ませ法の杖

かりそめに早百合生えたり谷の房

かの東阜にのぼれば

花いばら故郷の路に似たる哉

路たえて香にせまり咲いばらかな愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

洛東芭蕉落成日

耳目肺腸こゝに玉巻ばせを庵

青梅に肩あつめたる美人哉

青うめをうてばかつ散る青葉かな

かはほりやむかひの女房こちを見る

夕風や水青鷺の脛をうつ

たちばなのかはたれ時や古館

浪花の一本亭に訪れて

粽解て芦吹風の音聞ん

夏山や通ひなれたる若狭人

述懐

椎の花人もすさめぬにほひ哉

水深く利鎌鳴らす眞孤刈

しのゝめや露の近江の麻呂

探蓐を諷ふ彦根の僧夫哉

蓐の花や片われからの月もすむ

路邊の刈蓐花さく宵の雨

虫のために害はれ落柿の花

浪華の舊國あるじゝ諸國の俳士を集めて圓山に會進しける時

うき草を吹あつめてや花むしろ

さみだれのうつぼ柱や老が耳

湖へ富士をもどすやさつき雨

さみだれや大河を前に家二軒

さみだれや佛の花を捨に出る

小田原で合羽買たり傘月雨

さみだれの大井越たるかしこさよ

さつき雨田毎の闇となりにつけり

青飯法師にはじめて逢けるに舊

識のごとくかたり合て

水桶にうなぎきあふや瓜茄子

いづこより礫うちけむ夏木立

酒十駄ゆりもて行や夏こだち

おろし置笈に地震なつ野哉

行くてこゝに行ゝ夏野かな

みちのくの吾友に草扉をたゝか

れて

葉がくれの枕さがせよ瓜ばたけ
離別れたる身を踏込で田植哉
鯉得て歸る田植の男かな
狩衣の袖のうら這ふほたる哉

一書生の閑窓に書す

學問は尻からぬけるほたる哉
でゝむしやその角文字のにじり書
蝸牛の住はてし宿やうつせ貝
こもり居て雨うたがふや蝸牛
雪信が蠅うち拂ふ硯かな

齋贊

こと葉多く早瓜くるゝ女かな
關の戸に水雞のそら音なかりけり
蠅の舐も合歡の葉陰哉
蠅いとふ身を古郷に晝寝かな

春泥會、東寺山吹にて有けるに

誰住て密流るゝ鵜川哉
しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し
老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉

殿原の名古屋貌なる鵜川かな
鵜舟漕ぐ水窮まれば照射哉
夏百日臺もゆがまぬこゝろかな
日を以て數ふる筆の夏書哉

慶子病後不二の夢見けるに申遣す

降かへて日枝を廿の化粧かな

馬南刺髪、三本樹にて

脱かゆる梢もせみの小河哉
石工の鑿冷したる清水かな
落合ふて音なくなれる清水哉

丸山主水がちいさき龜を寫したるに贊せよとのぞみければ、仕官懸命の地に榮利をもとめむよりは、しかじ、尾を泥中に曳んには

錢龜や青砥もしらぬ山清水
二人してむすべば濁る清水哉
我宿にいかに引べきしみづ哉
草いきれ人死居ると札の立

雲がほやこの道唐の三十里
ゆふがほや黄に咲たるも有べかり
夕貌の花嘴猫や餘所ごゝろ

律院を覗きて

飛石も三ツ四ツ蓮のうき葉哉
蓮の香や水をはなるゝ莖二寸
吹壳の浮葉にけぶる蓮見哉
白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま
河骨の二もとさくや雨の中

座主のみこの、あなかまとて、やをらたち入給ひける、いとたうとくて

羅に遮る蓮のにほひ哉

夏日三句

雨乞に曇る國司のなみだ哉
負腹の守敏も降らす早かな
大粒な雨は祈の奇特かな
夜水とる里人の聲や夏の月
堂守の小草ながめつ夏の月
ぬけがけの淺瀬わたるや夏の月

河童の戀する宿や夏の月
瓜小家の月にやおはす隠君子
雷に小家は焼れて瓜の花
あだ花は雨にうたれて瓜はたけ
あるかたにて
弓取の帶の細さよたかむしろ
細脛に夕風さはる簾

箱根にて

あま酒の地獄もちかし箱根山
御佛に晝供へけりひと夜酒
愚痴無智のあま酒造る松が岡

寓居

半日の閑を寝やせみの聲
大佛のあなた宮様せみの聲
蟬鳴や行者の過る午の刻
蟬啼や僧正坊のゆあみ時
かけ香や何にとどまるせみ衣
かけ香や囀の娘のひととなり
かけ香やわすれ貌なる袖だゝみ

雁岩久しくおとづれせざりけれ

ば

有と見えて扇の裏繪おぼつか
とかくして笠になしつる扇哉
繪圖のそれも清十郎にお夏かな
手すさびの團畫かん草の汁
渡し呼草のあなたの扇哉

七口

祇園會や眞葛原の風かほる
ぎをん會や僧の訪よる梶が許

加茂の西岸に楊を下して

丈山の口が過たり夕すゞみ
網打の見えずなり行涼かな
すゞしさや都を堅にながれ川

葛岡が魂をまわく

河床や蓮からまたぐ便にも
川床に憎き法師の立居かな
涼しさや鐘をはなるゝかねの聲

鴨河にあそぶ

川狩や樓上の人の見しり貌

雨後の月誰や夜ぶりの脛白き
月に對す君に唐網の水煙
川狩や歸去來といふ聲す也

雙林寺獨吟千句

ゆふだちや筆もかはかず一千言
白雨や門脇どのゝ人だまり
夕だちや草葉をつかむむら雀

施米 水粉

腹あしき僧こぼし行施米哉
水の粉のきのふに盡ぬ草の菰
水の粉やあるじかしこき後家の君

旅意

廿日路の背中にたつや雲峰
揚州の津も見えそめて雲の峯
雨と成戀はしらじな雲の峯
雲のみね四澤の水の洞てより
飛蟻とぶや富士の裾野ゝ小家より
口歸りの元山越るあつさ哉
居りたる舟に寝てゐる暑かな

探題寄扇武者

暑き日の刀にかゆる扇かな
宗鑑に葛水給ふ大臣かな
葛を得て清水に遠きうらみ哉
端居して妻子を避る暑かな

花頂山に會して探題

龐居士はかたい親父よ竹婦人
虫干や甥の僧訪ふ東大寺
ところてん逆しまに銀河三千尺

宮島

薫風やともしたてかねついつくしま
裸身に神うつりませ夏神樂
つくばふた禰宜でことすむ御被哉
灸のない背中流すや夏はらへ
出水の加茂に橋なし夏祓

鴨河のほとりなる田中といへる
里にて

ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川

蕪村句集上巻終

蕪村句集

下

蕪村句集巻之下

几蓮著

秋之部

秋來ぬと合點させたる噓かな
秋たつや何におどろく陰陽師
貧乏に追つかれけりけさの秋
秋立や素湯香しき施藥院
初秋や餘所の灯見ゆる宵のほど
秋夜閑窓のもとに指を屈して世
になき友を算ふ

七夕

とうろうを三たびかゝげぬ露ながら
高燈籠滅なんとするあまたゝび
梶の葉を朗詠集のしほり哉

戀さまへ願の糸も白きより
つと入やしる人に逢ふ拍子ぬけ

あぢきなや蚊屋の裙蹈魂祭
魂棚をほどけばもとの座敷哉

十六日の夕加茂河の邊りにあそぶ

大文字やあふみの空もたゞならね
相阿彌の宵寝起すや大文字
攝待にきせるわすれて西へ行

英一蝶が畫に賛詠れて

四五人に月落かゝるおどり哉
ひたと犬の啼町越えて躍かな
萍のさそひ合せておどり哉

かな河浦にて

いな妻や八丈かけてきくた摺
いな妻の一網うつやいせのうみ
いなづまや堅田泊りの宵の空
稻妻にこぼるゝ音や竹の露

春夜に句をとはれて

日ごろ中よくて恥あるすまひ哉
飛入の力者あやしき角力かな
夕露や伏見の角力ちりふゝに
負まじき角力を寝ものがたり哉

遊行柳のもとにて

柳散清 水 洞 石 處

小狐の何にむせけむ小萩はら
薄見つ萩やなからむ此ほとり
山は暮て野は黄昏の薄哉
女郎花そも莖ながら花ながら
里人はさともおもはじをみなへし

永西法師はさうなきすきもの也
し。世を去りてふたとせに成け
れば、

秋ふたつうきをますほの薄哉

茨老すゝき瘦萩おぼつか
猪の露折かけてをみなへし
白萩を春わかちとるちぎり哉
垣ね潜る薄ひともと眞蘇枋なる
きちかうも見ゆる花屋が持佛堂

淵水湛如し藍

朝がほや一輪深き淵のいろ
朝貌や手拭のはしの藍をかこつ
夜の蘭香にかくれてや花白し
蘭夕狐のくれし奇楠を炷む

辨慶賛

花すゝきひと夜はなびけ武蔵坊
しら露やさつ男の胸毛ぬるゝほど
ものゝふの露はらひ行狛かな

妙義山

立去る事一里眉毛に秋の峰寒し
白露や茨の刺にひとつづゝ
狩倉の露におもたきうつぽ哉

市人の物うちかたる露の中

身にしむや横川のきぬをすます時
身にしむや亡妻の櫛を闇に踏
朝露やまだ霜しらぬ髪落

葛の棚葉しげく軒端を覆ひけれ
ば晝さへいとくらきに

葛の葉のうらみ貌なる細雨哉
朝貌にうすきゆかりの木槿哉
朝霧や村千軒の市の音
朝霧や杭打音丁ゝたり
もの焚て花火に遠きかゝり舟
花火せよ淀の御茶屋の夕月夜
八朔や扱明日よりは二日月
初汐に追れてのぼる小魚哉

となせの瀬

水一筋月よりうつす桂河
虫賣のかごとがましき朝寝哉
むし啼や河内通ひの小でうちん
みのむしや秋ひだるしと鳴なめり

竈て下葉ゆかしきたばこ哉
小百姓（鴉カ）を取老となりにけり
鬼灯や清原の女が生寫し
日は斜關屋の鎗にとんぼかな

良夜とふかたもなくに訪来る人
もなければ

中くゝにひとりあればぞ月を友
名月にゑのころ捨る下部哉
身の闇の頭巾も通る月見かな
月天心貧しき町を通りけり

忠則古墳一樹の松に倚れり

月今宵松にかへたるやどり哉
名月や雨を溜たる池のうへ
名月やうさぎのわたる諏訪の海

探題 雨月

旅人よ笠嶋かたれ雨の月
月今宵あるじの翁舞出よ
仲丸の魂祭せむけふの月
名月や夜は人住ぬ峰の茶屋

山の端や海を離るゝ月も今
庵の月主をとへば芋掘に
かつまたの池は闇也けふの月

鯉長が酔るや東義として玉山の
まさに崩れんとするがごとし其
倅今なを眼中に在て

月見ればなみだに碎く千々の玉
花守は野守に劣るけふの月

雨のいのりのむかしをおもひて

名月や神泉苑の魚躍る

探題 雁字

一行の鴈や端山に月を印す
紀の路にも下りず夜を行鴈ひとつ

雨中の鹿といふ題を得て

雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり

鹿寒し角も身に添ふ枯木哉

鹿啼てはゝその木末あれにけり

菜菔の霜夜は早し鹿の聲

三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲

殘照亭晚望

鹿ながら山影門に入日哉

ある山寺へ鹿間にまかりけるに
茶を汲沙彌の夜すがらねぶらで
有ければ普子が狂句をおもひ出
て

鹿の聲小坊主に角なかりけり
折あしく門こそ叩け鹿の聲

老懷

去年より又さびしひぞ秋の暮
父母のことのみおもふ秋のくれ
あちらむきに鳴も立たり秋の暮

猿丸大夫贊

我がてに我をまねくや秋の暮
門を出れば我も行人秋のくれ
弓取に歌とはれけり秋の暮
淋し身に杖わすれたり秋の暮

故人に別る

木曾路行ていざとしやらん秋ひとり
かなしさや釣の糸吹あきの風
秋の風書むしばます成にけり

金屏の羅は誰かあきのかぜ
秋風や干魚かけたる濱底

古人移竹をおもふ

去來去移竹移りぬいく秋ぞ
順禮の目鼻書ゆくふくべ哉
腹の中へ齒はぬけけらし種ふくべ

四十にみたずして死んこそめや
すけれ

あだ花にかゝる恥なし種ふくべ
人の世に尻を居へたるふくべ哉
我足にかうべぬかるゝ案山子哉

武者繪贊

御所柿にたのまれ貌のかゝし哉
姓名は何子か號は案山子哉
三輪の田に頭巾着て居るかゝしか
山陰や誰呼子鳥引板の音
雲裡房、つくしへ旅だつとて我
に同行をすゝめけるに、えゆか
ざりければ
秋かぜのうごかして行案山子哉

水落て細脛高きかゞし哉
故郷や酒はあしくとそばの花
宮城野、萩更科の蕎麥にいづれ
道のべや手よりこぼれて蕎麥花
落る日のくゝりて染る蕎麥の莖

題白川

黒谷の隣はしろしそばのはな
なつかしきしをにがもとの野菊哉
綿つみやたばこの花を見て休む
三徑の十歩に盡て蓼の花
甲斐がねや穂蓼の上を塩車
沙魚釣の小舟漕なる窓の前
百日の鯉切盡て鱸かな
釣上し鱸の巨口玉や吐

ひとり大原野、ほとり吟行しけ

るに、田崎荒蕪して千ぐさの下
葉菊をしのぎ、つれなき秋の日
影をたのみて、はつかに花の咲
出たるなど、ことには深し。

水かれ、蓼敷あらぬ敷蕎麥敷否敷

小鳥来る音うれしさよ板びさし
此森もとかく過けり鴉おどし
山雀や榎の老木に寝にもどる

竹溪法師丹後へ下るに

たつ鳴に眠る鴉ありふた法師
鳴立て秋天ひきゝながめ哉
わたり鳥こゝをせにせん寺林
わたり鳥雲の機手のにしき哉
瀬田降て志賀の夕日や江鯉
駒迎ことにゆゝしや額白
秋の暮辻の地藏に油さす
秋の燈やゆかしき奈良の道具市
追剎を弟子に剝けり秋の旅
秋雨や水底の草を踏わたる

丸山氏が黒き犬を誦たるに讃せ

よと望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋
甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋
枕上秋の夜を守る刀かな

身の秋や今宵をしのぶ型もあり

我則あるじゝて會催しけるに

小路行ばちかく聞ゆるきぬに哉
うき人に手をうたれたる砧かな
遠近をちこちとうつきぬた哉
うき我に砧うて今は又止ゝね
石を打狐守夜のきぬた哉
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉
門前の老婆子薪食る野分かな
麓なる我蕎麥存す野分哉
市人のよべ間かはすのはきかな
客僧の二階下り來る野分哉

三井の山上より三上山を眾て

秋寒し藤太が嫡ひゞく時

角文字のいざ月もよし牛祭
うら枯やかからきめ見つる漆の樹
物書に葉うらにめづる芭蕉哉

斗文、父の八十の賀をことぶく
に申附る

稻かけて風もひかさじ老の松

廣澤

水かれて池のひづみや後の月
山茶花の木間見せけり後の月
泊る氣でひとり來ませり十三夜
十月の今宵はしぐれ後の月
十三夜の月を賃することは我日
のもの風流也けり

唐人よ此花過てのちの月
日でりどし伏水の小菊もらひけり

山家の菊見にまかりけるに、あ
るじの翁、紙硯をとうて、ほ句
もとめければ、

きくの露受て硯のいのち哉
いでさらば投壺まいらせん菊の花

菊に古笠を覆たる畫に

白菊や吳山の雪を笠の下
手燭して色失へる黄菊哉
村百戸菊なき門も見えぬ哉
あさましき桃の落葉よ菊昌
菊作り汝は菊の奴かな

高雄

西行の夜具も出て有紅葉哉
ひつち田に紅葉ちりかゝる夕日かな
谷水の盡てこがるゝもみち哉
よらで過る藤澤寺のもみち哉
むら紅葉會津商人なつかしき

須磨寺にて

笛の音に波もより來る須磨の秋
雨乞の小町が果やをとし水
村くの寢ごゝろ更ぬ落し水
毛見の衆の舟さし下せ最上川
新米の坂田は早しもがみ河
落穂拾ひ日あたる方へあゆみ行

山家

猿どのゝ夜寒訪ゆく鬼かな
壁隣ものごとつかす夜さむ哉
缺くて月もなくなる夜寒哉
起て居てもう寝たといふ夜寒哉
夜を寒み小冠者臥たり北枕

長き夜や通夜の連歌のこぼれ月
山鳥の枝踏かゆる夜長哉
子鼠のちゝよと啼や夜半の秋
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
秋はものゝそばの不作もなつかしき

て
幻住庵に曉臺が旅籠せしを訪ひ

丸盆の椎にむかしの音聞む
椎拾ふ横河の兒のいとま哉

探題

餉いづにからき涙やとうがらし
俵して藏め蓄へぬ番椒
折くるゝ心こぼさじ梅もどき
梅もどき折や念珠をかけながら
にしき木を立たぬ垣根や番椒
稚子の寺なつかしむいてう哉
几童と鳴雛に遊ぶ
茸狩や頭を舉れば峰の月
茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ

うれしさの箕にあまりたるむかご哉
鬼貫や新酒の中の貧に處ゑ
栗備ふ恵心の作の彌陀佛
にしき木は吹たふされて鶏頭花

ある方にて

くれの秋有職いしやくの人は宿に在あす
いさゝかなをいめ乞れぬ暮の秋
行秋やよき衣きたる掛か人
跡かくす師の行方や暮の秋

洛東らくとうばせを庵にて

冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ

冬之部

みのむしの得たりかしこし初時雨
初しぐれ眉に烏帽子の雪哉
楠の根を靜にぬらす時雨哉
時雨るゝや簀さ買ふ人のまことより

しぐるゝや鼠のわたる琴の上
古傘の婆娑と月夜の時雨哉
しぐるゝや我も古人の夜に似たる
夕時雨蓑ひそみ音に愁ふ哉

人ひと高尾の山ぶみして一枝の

丹楓を贈れり。頃は神無月十日

まり、老葉霜に堪えず、やがて

はらはらと打ちりたる、ことに

あはれふかし。

爐に焼てけぶりを握る紅葉哉
初冬や日和になりし京はづれ
居眠りて我にかくれん冬ごもり
冬ごもり壁をこゝろの山に倚
冬ごもり燈下に書すとかゝれたり
勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり
冬ごもり佛にうときこゝろ哉

東山の麓に住どころトしたる一

音法師に申遣す

嵐雪とふとん引合ふ陀寝かな
いばりせしふとんほしたり須磨の里

古郷にひと夜は更るふとんかな
かしらへやかけん裾へや古衾
大兵のかり寝あはれむ蒲團哉
虎の尾を踏つゝ裾にふとんかな

十夜

あなたうと茶もだぶくと十夜哉

浪花遊行寺にてばせを忌をいと

なみける二柳庵に

簑笠の衣鉢つたへて時雨哉
夜興引や犬のとがむる塀の内
枇杷の花鳥もすさめす日くれたり
茶の花や白にも黄にもおぼつか
茶のはなや石をめぐりて路を取
咲べくもおもはであるを石路花
几童にいざなはれて、岡崎なる

下村氏の別業に遊びて

口切や五山衆なんどほのめきて
口切や小城下ながら只ならぬ
爐びらきや雪中庵の霰酒
狐火や欄腰に雨のたまる夜に

一條もどり橋のもとに柳風呂と
いふ娼家有。ある夜、太祇と
もに此樓にのぼりて

羽織着て綱もきく夜や川ちどり
風雲の夜すがら月の千鳥哉
磯ちどり足をぬらして遊びけり
打よする浪や千鳥の横ありき
水鳥や百姓ながら弓矢取
里過て古江に鷺を見付たり
水鳥や舟に茶を洗ふ女有
加茂人の火を燐音や小夜衛
泰里が東武に歸を送る

嗟哉寒しいざ先くだれ都鳥
早梅や御室の里の賣屋敷
宗任に水仙見せよ神無月
うかぶ瀬に遊びて、むかし栢庭
が此所にての狂句を思ひ出て、
其風調に做ふ。

小春風眞帆も七合五勺かな
冬の梅きのふやちりぬ石の上

千葉どのゝ假家引たり枯尾花
たんぼゝのわすれ花あり路の霜
老女の火をふき居る畫に

小野ゝ炭匂ふ火桶のあなめ哉
われぬべき年もありしを古火桶
うづみ火や終には煮る鍋のもの
炭うりに鏡見せたる女かな
裾に置いて心に遠き火桶かな
炭團法師火桶の穴より覗ひけり

讃州高松にしばらく旅やどりし
けるに、あるじ夫婦の隔なきこ
ころざしのうれしさに、けふや
其家を立出るとて

巨燵出て早あしもとの野河哉
腰ぬけの妻うつくしき巨燵かな
沙彌律師ころりくとふすま哉
鐸の音貧しさよ夜半の冬
飛彈山の質屋とざしぬ夜半の冬

奉夜樓會

むさゝびの小鳥はみ居る枯野哉

大とこの藁ひりおはすかれの哉
水鳥や枯木の中に駕二挺
子を捨る藪さへなくて枯野哉
草枯て狐の飛脚通りけり
狐火の燃へつくばかり枯尾花
息杖に石の火を見る枯野哉

金福寺芭蕉翁墓

我も死して碑に邊せむ枯尾花
馬の尾にいばらのかゝる枯野哉
蕭條として石に日の入枯野かな

大魯が病の復常をいのる

瘦脛や病より起ッ鶴寒し
待人の足音遠き落葉哉
菊は黄に雨疎かに落葉かな
古寺の藤あさましき落葉哉
往來待て吹田をわたる落ば哉

落葉を拾ひて紙に換たるもろこ

しの貧しき人も、腹中の書には
富るなるべし。さればやまとう
たのしげきことのはのうち散た

るをかきあつめて捨ざるは、我
はいかゝの道なるべし。

もしほ草柿のもと成落葉さへ
西吹々ば東にたまる落葉かな
鰻汁の宿赤くと燈しけり
ふぐ汁の我活きて居る寢覺哉
秋風の吳人はしらじふぐと汁
音なせそ叩くは僧よ鰻じる
河豚の面世上の人を白眼哉
甕うつて鰻になき世の友とはむ
椅着て鰻喰ふて居る町人よ

鶴英は一向宗にて、信ふかきお

のこ也けり。愛子を失ひて悲し
びに堪えず、朝暮佛につかふま
つりて、讀經をこたらざりけれ
ば、

らうそくの涙氷るや夜の鶴

大魯が兵庫の隠栖を、凡輩と、

もに訪ひて人々と海邊を吟行し
けるに、

風に鰻吹るゝや釣の魚

こがらしやひたとつまづく戻り馬
こがらしや晶の小石目に見ゆる
こがらしや何に世わたる家五軒
風やこの頃までは萩の風
木枯や鐘に小石を吹あてて
こがらしや岩に裂行水の聲

晋子三十三回

挿盆のみそみぐりや寺の霜
麥蒔や百まで生る貌ばかり
初雪や消ればぞ又草の露
初雪の底を叩ば竹の月

題七步詩

雪折や雪を湯に焚釜の下
雪の暮鴟はもどつて居るような
うづみ火や我がくれ家も雪の中
いざ雪見容す簑と笠
鍋さげて淀の小橋を雪の人
雪白し加茂の氏人馬でうて
雪折やよし野々夢のさめる時

漁家寒し酒に頭の雪を焼
朝霜や室の揚屋の納豆汁
入道のよゝとまゐりぬ納豆汁
朝霜や劔を握るつるべ繩
宿かさぬ火影や雪の家つゞき

几童と浪華より歸さ

霜百里舟中に我月を領す

故人曉登、余が寒爐を訪はずし
て歸郷す。知、是東山西野に吟
行して、荏苒として晦朔の代謝
を知らず、歸期のせまりたるを
いかむともせざる成べし。

牙寒き梁の月の鼠かな

陶弘景贊

山中の相雪中のぼたん哉
町はづれいでや頭巾は小風呂敷
引かふて耳をあはれむ頭巾哉
みどり子の頭巾眉深きいとをしみ
めし粒で紙子の破れふたぎけり
此冬や紙衣着ようとおもひけり

老を山へ捨し世も有に紙子哉
我頭巾うき世のさまに似ずもがな
さゝめごと頭巾にかづく羽折哉
頭巾着て聲こもりくの初瀬法師

題戀

貌見せや夜着をはなるゝ妹が許
かほ見せや既うき世の飯時分

かの曉の霜に跡つけたる晋子が
信に背きて風雪が慍に做ふ

貌見せやふとんをまくる東山
新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな
書記典主故園に遊ぶ冬至哉
水仙や寒き都のこゝかしこ
水仙や美人かうべをいたむらし
水仙や鵲の草莖花咲ぬ
冬ざれや小鳥のあさる菰菰
霜あれて菰を刈取翁かな
葱買て枯木の中を歸りけり
ひとつもじの北へ枯臥古葉哉

易水にねぶか流るゝ寒かな
血を踏鼠の音のさむさ哉

郊外

靜なるかしの木ばらや冬の月
冬こだち月に隣をわすれたり

この句は夢型に屬せし也

同二句

二村に質屋一軒冬こだち
このむらの人は猿也冬木だち
鶯に美を盡してや冬木立
斧入て香におどろくや冬こだち
鳴らし來て我夜あはれめ鉢叩
一瓢のいんで寝よやれ鉢たゝき
木のはしの坊主のはしやはちたゝき
ゆふがほのそれは觸體歎鉢敲
花に表太雪に君あり鉢叩
西念はもう寝た里をはち敲

御火焚といふ題にて

御火焚や霜うつくしき京の町

御火たきや犬も中くそゞろ貌
足袋はいて寝る夜ものうき夢見哉
宿かせと刀投出す雪吹哉
寺寒く櫓はみこぼす鼠かな
杜父魚のえものすくなき翁哉

貧居八詠

愚に耐よと窓を暗す雪の竹
かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥
我のみの柴折くべるそば湯哉
紙ぶすま折目正しくあはれ也
氷る燈の油うかゞふ鼠かな
炭取のひさご火桶に並び居る
我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴す
幽齋に筆の水を噴く夜哉
一しきり矢種の盡るあられ哉
玉霰漂母が鍋をみだれうつ
古池に草履沈みてみどれ哉
山水の減るほど減りて水かな

做二葉堂一

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり
から鮭に腰する市の翁かな
からざけや帯刀殿の臺所
訖禪師乾鮭に白頭の吟を彫
鐵骨といふは梅の枝を寫する畫
法也

寒梅や火の迷る鐵より
寒梅を手折響や老が肘

感偶

寒月や門なき寺の天高し
寒月や鋸岩のあからさま
寒月や枯木の中の竹三竿
寒月や衆徒の群議の過後
寒聲や古うた諷ふ誰が子ぞ
細道になり行聲や寒念佛
極樂の近道いくつ寒念佛
寒垢離や上の町まで來たりけり
寒ごりやいさまいりぞふ一手桶
几童判句合
鯨賣市に刀を敲しけり

しづくと五徳居えけり藥喰
藥喰隣の亭主箸持參
くすり喰人に語るな鹿ヶ谷
妻や子の寢貌も見えつ藥喰
客僧の狸寢入やくすり喰

春泥合に遊びて

鹽運もこよひはゆるせとし忘
にしき木の立間もなき雜魚寢哉
おとろひや小枝も捨ぬとし木樵
うぐひすの啼や師走の羅生門
御經に似てゆかしさよ古曆
としひとつ積るや雪の小町寺
ゆく年の瀬田を廻るや金飛脚
とし守夜老はたうとく見られたり

題香

石公へ五百目もどすとしのくれ
とし守や乾鮭の太刀鐔の棒
笠着てわらちはきながら
芭蕉去てそのうちいまだ年くれず
蕉村句集下巻終

夜半翁常にいへらく、發句集はなくてもありなんかし、世に名だゝる人の其句集出て、日來の聲譽を減ずるもの多し、況汎々の輩をやと。しかるに門派に一人の書肆ありて、あながちに句集を梓にちりばめむことをもとむ、翁もとよりゆるさず。翁滅後にいたりて、二三子が書とめおけるをあつめて、是を前後の二編に撰分て、小祥・大祥二忌の追福のためとすと也。其志又淺からずといふべし。されば句集を世に弘うすることは、あなかしこ翁の本意にはあらず、全く是をもて此翁を議すべからずといふ事を田福しるす。

天明四甲辰之冬十二月

京寺町通五條上ル町
書肆 汲古堂

榮佳

蘇村公羽文集

松無村文集乾

一 歲旦辭

一 賀辭

一 松望辭

一 追慕辭

一 夢文說

一 夢文說

一 芭蕉堂再興記

一 宇治行

一 馬堤曲

一 螺盃銘

一 土器賞賛

一 公羽の鉢貝

一 俳仙賛

一 狐の尾はよい

代々々々々々

蕪村翁文集序

おのれ年頃、蕪村翁の風骨をしたへるまゝに、あるは書あるはその賛などあつめしに、いつのほどにか賛のたぐひ、はた序文のときをも書あつめおくことになりしを、とし菊舎のあるじが伊勢路におもむくとして訪來しに、此とをかたりいへるに、そはおのれも

蕪村翁文集序

おのれ年頃は、
 蕪村翁の風骨を
 したへるまゝに、
 あるは書あるは
 その賛などあつめ
 しに、いつのほどに
 か賛のたぐひ、はた
 序文のときをも書
 あつめおくことにな
 りしを、とし菊舎
 のあるじが伊勢路
 におもむくとして
 訪來しに、此とを
 かたりいへるに、
 そはおのれも

このみて久しく書お
きたるものあり、そ
をあはせて梓に行ん
にはと、かりそめの
すゝめに心うつりし
て、終に冊子とはな
しぬ。かくて此とを
はじめにするす。

文化丙子春

湖東其獨亭主人

このみて久しく書
きたるものあり、そ
をあはせて梓に行
にはと、かりそめ
のすゝめに心うつ
りして終に冊子と
はなしぬ。かくて
此とを最初にする
す。

文化丙子春

湖東其獨亭主人

凡 例

一、燕村翁文集は先年月居叟の門人宰町子に託して書あつめられし草稿ありしが、いつの頃にや其稿失ぬるよし、をしむべし。己もとより翁が文をしたひ、見るにまかせ聞にまかせて書あつめたるものあり。はた湖東忍雪ぬしもおなじ心に書とめられしを、ともに爪ぞろへしてかゝるどにはなしぬ。

一、支麥の文章妙なりといへども、言卑俗なるもの多ければ、翁が文章の世にひろからんとをねがふは、かゝるゆゑんにこそ。

洛 其 成 し る す

蕪村文集乾

洛 竹巢月居 閑

潮東 其獨亭忍雪

洛 醉菴其成 輯

歲旦辭

祇園會のはやしものは、不協秋風音律。
蕉門のさびしをりは、可避春興盛席。
歳旦をしたり貌なる俳諧師

賀辭

つちのとの亥をはじめとし、又もや松の
みどり子にこまがへり、老行さきの千、
の春風吹つたへて、つきせぬ宿のめでた
さを、大和の國なる何來の主が本卦の賀
に申侍る。

一字借書

大和假名の字を兒の筆はじめ

簗笠辭

さくら見せうぞ、ひの木笠と、よし野の旅
にいそがれし風流はしたはず。家にのみ
ありて、うき世のわざにくるしみ、そのこ
とはとやせまし、このことはかくやあら

むなど、かねておもひはかりしことも、

えはたさず。つひには煙霞花鳥に辜負す

るためしは、たゞ世のありさまなれど、

今更我のみおろかなるやうにて、人に相

見んおもてもあらぬこゝ地す。

花ちりて身の下やみやひの木笠

追慕辭

歲旦説

ことしは歳旦の句もあらじなどおもひゐ
けるに、臘月廿日あまり八日の夜のあか
つきのゆめに、あやしき翁の來りていふ
やう、おのれはみちのくにの善正殿にた
のまれまいらせて、京うちまゐりし侍
るおきななるが、よきついでなれば、そこ
に奉るべきものゝ侍れば、こゝにまほで

太祇居士が十三回追善の俳諧にまねかれ
ける日、風雨ことに烈しかりければ、か
くては道のほどいかにやなど人のせちに
とどめけるを、簗笠や有、とく得させよと
云罵りて、ことゝしき老の出立いとお
かしく、からうじて不夜庵にいたりぬ。か
の登蓮法師が風流とは品かはりたると、
こゝろざしの誠はなかか恥べきにや
と、頓て佛前に向て、
線香やますほのすゝき二三本

來ぬとて、ひらつじみときて、根松のみ
どりなるをふたもととうで、これを御
庭のいぬの腰に植おき給はど、かぎり
なきよろこびをも見はやし給はんといひ
つゝ、かいけちて見えすなりぬ。ゆめう
ちおどろきても、此翁にむかひかたるや
うにおぼえて、かの武隈の古ことおもひ
出られてかくは申侍る。

我門や松はふた木を三の朝

夢説

夢に播磨がたに舟をうかぶ。風おもむろ
に浪あらそはず。悠々たる春光、其興い
ふばかりなし。さあるほどに、此舟つゆ
もうごかず、只鉄索をもて金軸に繋ぎた
るがごとく、舟子どもとかくすれど、や
りぬべくもあらず。思ふに鰐てふものゝ
ねたく見入たるにこそと、舟中の人々た
だ泣になきつ。おの／＼身にそふ寶をと

帆風のふとし流さん春の海

芭蕉堂再興記

四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり、金
福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼。
階前より翠微に入ること二十歩、一塊の
丘あり、すなはちばせを庵の遺蹟なりと
ぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔
やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽
篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行
雲停り、樹老鳥睡りて、頻に懷古の情に絶
す。やうやく長安名利の境を離るゝとい
へども、ひたぶるに俗塵をいとふとしも
あらず。鶏犬の聲籬を隔て、樵牧の路門を
めぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を
沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客
めかれしより、きのふや鶴を盗まれしと
の相往來して、半日の閑を食るたよりも
よく、飢をふせぐまほけも自在なるべ
し。抑いつの頃よりさは唱へ來りけるに
や。草かる重葵うつ女にも、芭蕉庵を問
へば必ずかしこを指す。むべ古き名なり
けらし。さるを人其ゆへをしらず。竊に
聞、いにしへ鉄舟といへる大徳、この寺に
住たまひけるに、別に一室を此ところに
構へ、手自雪炊の貧をたのしみ、客を謝
して深くかきこもりおはしける。蕉翁の
句を聞ては泪うちこぼしつゝ、あなたう
ぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔
やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽
篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行
雲停り、樹老鳥睡りて、頻に懷古の情に絶
す。やうやく長安名利の境を離るゝとい
へども、ひたぶるに俗塵をいとふとしも
あらず。鶏犬の聲籬を隔て、樵牧の路門を
めぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を
沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客
めかれしより、きのふや鶴を盗まれしと

孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して、湖水一望のうちに杜甫が背を決、つひに辛崎の松の麗々たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都徑徊のたよりよければとて、をりく北岩阿に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野の夢のあとなくなりたまひしのち、かの大徳ふかくなげきて、すなはち艸堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこびて亭に名づくるなど、異くにともさるためしは多かるぞ。しかはあれど此ところにて蕉翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず。ましてかい給へるものゝ筆のかたみだになければ、いちじるくあらそひはつべくも覺えぬ。住侶松宗師の曰。さりやうき我をさびしがらせよとわび申されたる閑古鳥のおぼつかなきは此山寺に入お

はしてのすさみなるよし、此ころまで世にありし耆老のふみのみちにも心かしこきが物がたりし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流去水ぐきの跡などかのこらざるべき。さるを無功徳の宗風こゝろ猛く、不立文字の見解まなこきらめき、佛經聖典もすてゝ長物とす。いかでさばかりのものたくはへ藏すべきなど、いとさうくしき狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほろびにけん。びんなきわざなりなど、かなしみ聞ゆ。よしやさ追ふべくもあらず、唯かゝる勝地に、かゝるたとき名のゝこりたるを、あい笠はかりなる松たけ五本を得たり。あなめざまし、いかに宇治大納言隆國の卿は、ひらたけのあやしきさはかいとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや。

君 見よや拾遺の茸の露五本

宇治行

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲
鮎を葉として、世わたるたよりとなすよ
し。茅屋雲に架し、斷橋水に臨む。かゝ
る絶地にもすむ人有りと、そとに客魂
を冷す。

鮎落ていよゝ高き尾上かな

米かしといへるは宇治河第一の急灘に
して、水石相戰奔波激浪、雪の飛がごとく
雲のめぐるに似たり。聲山谷に響て人語
をみだる。銀瓶乍破、水漿迸。鐵騎突出、
刀鎗鳴。四絃一聲如裂帛と白居易が琵琶
の妙音を比喻せる絶唱をおもひ出て

帛を裂琵琶の流や秋の聲

余一日問耆老於故園。澆澌水過馬堤。
偶逢女歸省鄉者。先後行數里。相顧
語。容姿嫋媚癡情可憐。因製歌曲十
八首。代女述意。題曰春風馬堤曲。

春風馬堤曲 十八首

やぶ入や浪花を出て長柄川

春風や堤長うして家遠し

堤下摘芳草

荊與蘇塞路

荊蘇何無情

裂裙且傷股。

溪流石點々

踏石撒香芹

多謝水上石

教儂不沾裙。

一軒の茶見世の柳老にけり

茶店の老婆子儂を見て慇懃に

無差を賀し且儂が春衣を美ム。

店中有二客

能解江南語

酒錢擲三船

迎我讓榻去。

古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず

呼雛雛外鷄

雛外艸满地

雛飛欲越籬

籬高隨三四。

春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ。

たんぽぽ花咲り三々五々は黄に

三々は白し記得す去年此路よりす。

憐しる蒲公英短して乳を漉。

むかしくしきりにおもふ慈母の恩。

慈母の懷抱別に春あり。

春あり成長して浪花にあり。

梅は白し浪花橋邊財主の家。

春情まなび得たり浪花風流。

郷を辭し弟に負て身三春。

本をわすれ末を取接木の梅。

古郷春深し行て又行。

楊柳長堤道漸くくれたり。

嬌首はじめて見る故園の家、

黄昏戸に倚る白髮の人、

弟を抱き我を待春又春。

君不見古人太賦が句

藪入の寐るやひとりの親の側

源河歌 三首

春水浮梅花

南流菟合澱

錦纜君勿解

急瀬舟如電

菟水合澱水

交流如一身

舟中顧同寢

長爲浪花人

君は水上の梅のごとし、花水に

浮て去ること急也。

妾は江頭の柳のごとし、影水に沈てしたがふことあたはず。

老鸛兒

春もやゝあなうぐひすよむかし聲

春もさむき春にて御座候、いかゞ御暮被成候や、御ゆかしく存候。しかれば春

興小冊漸出板に付、早速御めにかかけ申候。外へも乍御面倒、早々御達被下度候。

延引に及候故、片時はやく御届可被下候。

一春風馬堤曲 原堤は毛馬堤也
則余が故園也

余幼童の時、春色清和の日には必友どちと此堤上にのぼりて遊び候。水に

上下の船あり。堤には往來の客あり。

其中には田舎娘の浪花に奉公して、か

しくく浪花の時勢粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、正傳しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄

弟を恥いやしむもの有。されども流石

故園の情に不堪、偶親里に歸省するあ

だ者成べし。浪花を出てより親里迄

の道行にて、引道具の狂言、座元夜半

亭と御笑ひ可被下候。實は愚老懷舊の

やるかたなきより、うめき出たる實情に候。

當春帖は同盟の社中斗にて、他家を交す候。それ故伏水の諸家をももらし申候。御

出會候節其御噂被成、諸子腹立なき様に被仰談可被下候。桃には下り候て、寛々御

物がたり可仕候。數狀したゝめ老眼つかれ、舛々かしこ

二月二十三日

夜半

蝶蓋露

むかし／＼うら嶋が子、龍のみやこに至

りて、乙姫に配偶す。あらぶる眷族賀を献す。おの／＼かしらに鱗甲をかざりと

す。それが中に大なる貝をいたゞくもの有、光輝人を射る。浦嶋子心に是を欲す、

終に得て水の江の浦にうかぶ。浪花のう

かぶ瀬是なり。後又乙姫、倭藤太を迎て

宴す。玉盃を出して酒をすゝむ。藤太其

盃の美なるを愛す。別に臨て、乙姫許多の寶を將て藤太を送る。其貝すなはち其

一つなり。傳て今徳野が家に藏む。予に其銘を乞ふ。予おもふ浦嶋が子は與謝の

海に得たるをもてうかぶ瀬といふ。藤太嶋のうみにこれを得たり。それ浮巢と呼

ん歟。一盃一盃又一盃。長く子が家に傳てしらず幾万盃ぞ。

土器寶簀

深草のほとりに年ひさしくかくれすむあ

やしき翁ありけり。手づからかはらけをつくりて、いつもとしの末にはみづから荷ひいで、みやこの町／＼をひさきあ

りくのみ、常は何いとなむともなく、草の濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しとぼそふかくかきこもりて、その齢いくばくと、ふことをしらず。昔時より老にして今も老なり。かのしらはしの翁のたぐひにやあらむ。いとゆかしきことなり。

おもかげもかはらけ／＼年の市

翁の賛

張九齡は明鏡の裏に白髪を憐み、丈山は清き流れに老の面影を恥。こゝにひとり隠士あり、いづれのところの人といふことをしらず。常に葛てふものをたしめば、人呼て葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、おのづからかきつばたの秀句を通れ、資朝の卿に逢奉らざれば、むく犬のそしりもなし。只生前一盃の葛水、身後の榮聲にかへなまし。されば清

葛水や鏡に息のかゝる時
葛水に見る影もなき翁かな
此意を了解したるものは誰、其日ぐらし翁有。このことをのぶるものは誰、夜半亭燕村なり。

守武貞徳をはじめ、其角風雪にいたりて、十四人の俳仙を畫きてありけるに、賛詞をこはれて、

此俳仙群會の圖は、元文のむかし余弱冠の時寫したるものにして、こゝに四十有餘年に及べり。されば其拙筆いまさら恥べし。何ぞ烏有とならずや。今又是に賛詞を加へよといふ、固辭すれどもゆるさず。則筆を洛下の夜半亭にとる。

花散月落て文斯にあら有がたや

むかし五條わたりになまめける法師に俱せられたりけるをうな有けり。世のそしりをいとひて、みそかなるところに住けり。いろおとろひてかの法師かよはずなりけり。女いといと身をうらみてゆくゑなくなりけり。

しら露の身や葛の葉の裏借家

右はきつねの法師に化たる畫に賛をこはれて、とみにかいつけやりける。

蕪村文集坤

洛 竹 巢 月 居 関
湖 東 其 獨 亭 忍 雪 輯
洛 醉 庵 其 成

春泥集序

柳維駒、父の遺稿を編集して余に序を乞。序して曰。余曾て春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問。

答曰。俳諧は俗談を用て俗を離るを尙ふ。俗を離れて俗を用ゆ。離俗の法最かつし。かの何がしの禪師が隻手の聲を聞といふもの、則俳諧禪にして離俗の則なり。波頓悟す。却問。叟が示すところの離俗の説、其旨玄なりといへども、なほ是工案をこらして我よりしてもとむるものにあらすや。しかし彼もしらず、我もしらず、自然に化して俗を離るゝの捷徑あり

や。答曰。詩を語るべし。子もとより詩を

能す。他にもとむべからず。彼疑敢問。夫を俳諧とて詩を語れと云。迂遠なるに

あらずや。答曰。畫家に去俗論あり。曰。畫去俗無他法、多讀書則書卷之氣上

升、而市俗之氣下降矣。學者其慎旃哉。それ畫の俗を去だにも、筆を投じて書を讀しむ。況、詩と俳諧と何の遠しとす事あらんや。波則悟す。或日又問。いにしへより俳諧の數家、各々門戸を分、風調を異にす。いづれの門よりして歟其堂奥をうかがはんや。答曰。俳諧に門戸

なし、只是俳諧門といふを以て門とす。

又畫論曰。諸名家不分門戶、門戶自在其中。俳諧又かくのごとし。諸流を盡してこれを一囊中に野へ、自其能物を撰び、用

に隨て出す。唯自己の胸中いかんと願るの外他の法なし。しかれども常に其友を

撰びて、其人に交るにあらざれば、其郷に至ることかたし。波問。其友とするものは誰ぞや。答。其角を尋ね、嵐雪を訪

ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日、此四老に會してはつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、酒を酌

て談笑し、句を得る事は專不用意を貴ぶ。かくのごとくする事日々。或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめのごとし。眼を

閉て苦吟し、句を得て眼を開く。忽四老の所在を失す。しらすいづれの所に仙化して去るや。恍として一人自イむ。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是子が俳

諸の郷なり。波微笑す。つひに我社裏に

歸て、句を吐くと數千。最、麥林支考を

非斥す。余曰。麥林支考其調賤しといへ

ども、工みに人情世態を盡す。さればま

ま支麥の句法に倣ふも、又工案の一筋な

らざるにあらず。詩家に李杜を貴ぶに論

なし。猶元白を捨ざるがごとくせよ。波

曰。叟我をあさむきて野狐禪に引ことな

かれ。畫家に吳張を畫魔とす。支麥は則

俳魔ならくのみ。ます／＼支麥を罵

て、進て他岐を願す。つひに俳諧の佳境

を極むべし。をしむべし、一旦病にふして

起つことあたはず。形容日々にかじけ、湯

藥ほどこすべからず。預め終焉の期をさ

し、余を招て手握て曰。恨らくは叟と

もに流行を同じくせざることと。言終

て涙潸然として泉下に歸しぬ。余三度泣

て曰、我俳諧西せり。我俳諧西せりと。右

のことば、夜半茗話といふ冊子の中に記

せる文なり。夜半茗話は余が机邊の隨筆

にて、たゞもろ／＼の人と討論せし事を

雜録したるものなり。然に其文を其ま、

にて、此の集の序とすることは誠に故

有。此文を見て波子が清韶(酒)落なるや、

其ひと／＼なりをしつて、その句の偽り無

事を味ふべし。かの席の皮を引かぶつた

る羊に類すべからずといふを、洛下の夜

半亭に於て、六十二翁燕村書

蘆蘆句選序

むかし丹波の國に大なる壁もたるおきな

有けり。そのたまうちひかりをかくし

てゆかしさ云んかたなし。人其玉を百貫

にかはんといふ。翁おもふやう、かくてだ

にあるをひかりまさばあたひなほかぎり

あらじとおもひて、百貫にはえこそとて

うらす。さて夜に日にすりみがきけるほ

どに、はつかに瑕あらはれ出ぬ。翁あさま

しとまどひて、いよ／＼すりみがくにし

たがひ、きす大に玉はまめばかりにな

りぬ。はじめかはんといひし人も、今はは

なおほひつゝ、さたなくなりけるとぞ。

されや大魯が門流蘆陰遺稿といふものを

出さんとして、序を予にもとむ。予が

曰。遺稿は出さずもあらなん。いにしへ

より作者のきこえあるもの、遺稿出て還

て生前の聲譽を減ずるものすくなから

ず。大魯はもとより攝播維陽の一大家と

呼れて、我門の義雛なりし。さればその

佳句秀吟は人おのおの膾炙す。たれか遺

稿の出るを期せんや。はた遺稿を出し

て、かの玉もたる翁に倣ふことなかれ。門

流肯す。ひそかに草稿をあつめて、几董に

託して校合せしめ、彫刻牛バにいたる。

しかしてふた／＼び序を予にもとむ。こゝ

におゐてやむべからず、取てその草稿を

閱す。予歎じて曰。遺稿出すべし。遺稿い

で、人いよ／＼その完璧をしるべし。是大魯が身後の榮、ます／＼その光を加ふるに足らん。門流微笑して去。このこと又序とすべし。

五車反古序

維駒父の十三回忌をまつるに、集えらびて五車反古といふ。ふかき謂あるにあらず、父の冬ごもりの句によりて號けたる成べし。はた父の筆まめに書あつめたるものを、よ／＼とねぢこみたる袋の紐ときて見れば、爾答の詩の草稿あり。或は花に來たれといふ天駒のふみあり。今宵の雪をいかにやなどそゝのかす高陽の徒の手紙あり。又は云すてたる歌仙の半ばかりにして、ところ／＼墨引たるあり。其裏には多く人の句もみづからの句もかいつけたり。それとかくつまぞろへして、

今の世の人の句も打まじへ、ならべもて

ゆくほどに、上下二冊子となりぬ。序を余にもとむ。余病にふして月を越れど起こゝとあたはず、筆硯の業を廢することひさし。故をもて其ことを果さず、これこま忌日のせまりちかづくをかなしみ、しばしば來りもとむ。余曰。明日を待て稿を脱せん。明日すなはち來る。病ます／＼おもひ去る。余も又追はず。他日そのことを書して序とす。

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角嵐雪素堂去來鬼つらなり。其角嵐雪おの／＼其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもること侍らず。ひとり

鬼貫は大家にして、世に傳ふる句まれなり。不夜庵太祇としごろかのことを嘆きて、もしほ草こゝかしこにかき集めて數百句を得たり。たとへば治海に網して魚をもとむるがごとし。なほもれたるものいくほどこ侍らん。さるを鬼貫句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋自笑也。

平安二十歌仙序

蕉翁去來一紙兩筆ノ書は、向某ヨリ菊唇ニ傳來ス。唇又長松下隨古ニ譲ル。唇ハ古ガ叔父ナリ。向某ハ去來力通家也。

右一紙兩筆のふみは、長松下の藏るところにして、げに稀有のものなり。其頃去來はさうなき作者にして、蕉翁もこのをこ欺きがたしとつぶやかれけるとぞ。さある人のかゝる脇なんどせんと（に）

いとたやすかるべきを、自らの意にこと
はりかねてや、翁のさをこひもとめけ
る。殊勝の事にこそ侍れ。さてこそ翁も
かくやなと、ひねり直れけるも、なほこ

ころゆかすや侍りけむ「禮者うすらぐ春

雲集序

のしづかさ、と砥並山には聞へにける。一

日本祇囃山長松下を訪ひ、この書をひら
き見て、いにしへの人の道に深切なるこ
と、かばかりに侍れば、すぐろ懐古の情

にたえず。やがて三吟の發端となりて、

甘々の席をかさねて、はたちの歌仙なり
ぬ。しかはあれど其角が月に囁く体にも

傲はず、嵐雪が花にうらめる姿にも擬せ
ず、まいて今の世にもてはやす蕉門とや

らん質をもはらにするにもあらず、たゞ

己が心のさまに、おもひ邪なきをの

みたとぶなるべし。もとより三子の意に
得たりとする俳諧にもあらねば人の見む
こともいとくるしとて草稿のまゝにて橘

仙堂が棚架に打すてありけるを、あたら

三吟なり、なんぞにしたまへと斥して、

三子を催すものは、三葉散人蕉村書

遅日卒の主人卓下をまほけ、諸子を引て

宴す。磁器玉盤、猩唇駝峰、窮山之珍、場

水之錦、盡く具せずといふことなし。日

午より夜半にいたりて、よく蠶食すべか

らず。我黨只うらむ便たる腹中、文雅

の貯なきことを。纔に題を分ち、俳歌をう

たふて詩賦に換へ、庭に歩し月に囁く。

豈仙家の歌に譲るべけんや。

月の句を吐てへらさん蟻の腹

本義句集序

太祇甘而小言すらく、宵によしなら漬と

云んより、なら茶と云んこそ、俳諧のさ

びしみなれ。焦遂が五斗はそらにさはが

し。蕉翁の二斛こそ、長く靜にして、鉄

杵を鉢に磨かし、點滴の石を穿つをしへ

にも叶て、我業の卒る時もありなむ。か

りにもおこたりすさむべからずとて、佛

を拜むにもほ旬し、神にぬかづくにも發

句せり。されば祇が句集の草稿を打かさ

ねたるに、あなおびたゞし、人のイめる

肩ばかりにくらべおほゆ。げにやいせの

はま萩のおきふしにも、ふんではなさせ

ず。勃卒として口よりいづるにまかせ、

書おけるものにしあれど、なにはのあし

のいづれ刈すつべきも見えねば、葎亭宛

在の撰者も眼つかれ、心まどひてまめや

かにゑらみ侍るべうもあらじかし。余二

子にいふ。さははつべき期あらめや。大か

たにこそあらまほしけれ。たゞ四時のほ

じめごとに出せる五六紙がほどをゑらみ

取て初稿と題し、木にきさみて世にひろ

うし、二稿三稿といへるものは、年を経て

もほむとぐべきわざなれとすゝめければ、二子もうけひきて、かしこうこそ申つれ。さらば其ことを世にことはり聞えよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

隱口壇序

こもりくの初瀬の堂の片隅に、まきもくのひの木笠うちしきて、ゆかしき春の旅寐姿は、よきもの見たるよし野の勞れを休んとなるべし。されば其吟魂のおりくこの境にやどり來まさむことを願ひて、草をくさぎり、土をかきあつめて、一基の碑をいとなみ建るものは、やまとの好士何來なり。そのはじめに筆をたてて、手むけの句を奉るものは、平安の蕪村なり。蕪村百拜して書。

草臥てねにかへる花のあるじかな

桃李序

いつのほどにか有けん、四時四まきの歌仙有。春秋はうせぬ。夏冬はのこりぬ。一人請て木にゑらんといふ。一人制して曰。この歌仙ありてやゝとし月を経た

むかしと今の序

亡師宋阿の翁は、業を雪中菴にうけて、百里琴風が輩と鼎のごとくそばだち、ともに新意をふるひ、俳家の聞えめでたく、當時の人ゆすりて三子の風調に化しけるとぞ。おのゝ流行の魁首にして、尋常のくはだて望むべききはにはあらざめり。師やむかし武江の石町なる鐘樓の高く臨めるほとりに、あやしき舍りして市中に閑をあまなひ。霜夜の鎮におどろきて老のねざめの憂き中にも、予とゝもに俳諧をかたりて、世の上のさがごとなどまじらへきこゆれば、耳つぶして、いととも申ほときぬ。

り。おそらくは流行におくれたらん。余

笑て曰。夫俳諧の活達なるや、實に流行

有て實に流行なし。たとはゞ一圓郭に添

て、人を追ふて走るがごとし。先ずする

もの却て後れたるものを追ふに似たり。

流行の先後、何を以てわかつべけんや、た

だ日々にをのれが胸懷をうつし出て、け

ふはけふの俳諧にして、翌は又あすの俳

諧なり。題してもゝすもゝといへ、めぐり

よめどもはしなし。是此集の大意也。

其雲影序

今や上侯伯より、下漁樵におよぶまで俳

諧せざるものなし。それが中に一家をも

て世に稱せらるゝことは、きはめてかた

し。京攝の隆三四指を屈するだにもいた

らず。そもゝ三四とは誰、几圭其大指

を領せり。圭はじめ巴人庵の門にあそび

て、その真卒に倣はず、かたはら半時菫

徒に交りて、其贅牙に化せられず。ひと

り俗談平話をもて、たくみに姿情を盡せ

り。たとはゞ小説の奇なることば、諸史

のためたき文より興あるがごとし。圭去

りて又圭なるもの出ず。人或たまゝ人

情世態のおかしき句を得れば、則云圭流

なりと。こゝに於てて一家の論盡ぬ。こ

と十三回、其子几童、小冊子を編て父の

魂を祭る。世の追善集つくるにはやうか

はりて、あながち紫雲青蓮の句をもとめ

ず、ひとへに弄花酔月の吟を拾ふ。魚肉

蔬蕒、雜組にして供するものゝごとし。余

曰。さはよし。又父が意なり。かの闇室

にこもり、せうじいとまめやかに、手念

珠をはなたず、稱名ことゝしく、尼法

師にこび仕へて、あやしく着ふくれたら

んよりは、鶏骨床を支ゆれども、かたち

かじけ、眼うちくぼみたるかたにこそ、

几童之

して、雲外の一聲睡をさまし、言下に

此編、其幾乎。

花鳥篇序

郭文が勝具なければ、鬼貫が禁足にはく

みしやすきにや。みよし野の山ぶみも、

かり寐のゆめにたどり、あらしのやまの

春のゆくをだに、しらぬるびすごゝろい

とさうんくしければ、せめて朝夕草扉に

おとづるゝ人の、花さくらの吟詠をほく

のはしにかいつけ、一帖にものして、臥

遊のよすがにもとおもひたちつゝ、とか

くするほどに、春煙眼を過ぎ、緑樹窓を

ひ、荏苒として去つくす、日にゆふべをか

こち、蕭條とふりくらす雨に曉をしらず、

怠りがちな老の身をうらみて、ひとり

几上に肘する折ふし、ある人梅翁のたん

ざくを得て、この句にわきをよと、云ひ

おこせたるを取上て見れば、手澤淋漓と

句を吐、所謂狗尾をもて貂に繼たるこゝ地するを、門下の二三子第三第四とつけゆくまゝに、やがて三十六句にみちぬ。いとよし花櫻の後へに附して、則花鳥篇と題號して、我疏懶の罪を謝することしかり。

一たびこれを開けば、かの去嫌取捨、掌をさすがとし。まことに俳諧の王字通也。鶯喬は夫白鹿洞の人か。

俳題正名序

俳諧の去嫌のこととは、諸書にあらはしてその法をむくべからず。しかれども俳諧は活物也。時に臨て其法を背くも又法とす。付ケに疎密あり句に輕重あり。一卷の緩急、句行の浮沈を相顧て、或おもてきらふものを七句にゆるし、字去のものを五句に禁ずる事あり。法は四時のどし。去嫌の扱ひは風雨寒暖のごとし。變化なし。神釋祭奠の正名、草木鳥獸の正字をしらざる時は、その變に應ずることかたし。伏水鶯喬、俳題正名を著す。

燕村文集下終